

研究主題

「仲間とのかかわり合いの楽しさを感じ、主体的・協動的に学ぶ児童の育成」

～ 未来へとたくましく生きる体づくりができる子どもの育成をめざして ～

1 研究主題について

児童を取り巻く環境が変わり、様々な問題が指摘される中、体育の学習では、「友だちと共に体を動かすことが楽しい」という経験を積ませることが重要であると考え、西伯郡は、「仲間とのかかわり合いの楽しさを感じ、主体的・協動的に学ぶ児童の育成」～運動を通して仲間とのかかわり合いの楽しさが感じられる体育学習をめざして～と設定した。

2 研究の実際

①仲間とのかかわり合いの楽しさを感じるために（かかわり合いの楽しさを生む手だて）

- ・課題解決的な学習（単元前半は自分たちで考えた動き、後半は仲間と動きのポイントをまとめ、自分が解決したい課題を選択し、挑戦する。）
- ・単元を通して行う小集団による学びのサイクル（運動技能が異なるペアやトリオなど）
- ・オリエンテーションでよい動きのポイントを見つけ合う時間の設定
- ・基礎的・感覚的な動きを身に付ける運動

②「主体的」に学ぶ児童の姿を育むために（学習状況を明確にするための手だて）

- ・児童の「学びに向かう力、人間性等」に着目した指導計画
- ・「楽しさ」の散りばめ
- ・一単位時間の流れ
- ・場の設定、教具の開発や工夫、ICTの活用

③「協動的」に学ぶ児童の姿を育むために（学習過程の在り方に迫るための手だて）

- ・「よい動きを共有する時間」から「学びを価値付ける時間」へ
- ・「伝え合い活動」の展開（言語活動の充実）
- ・「学びを価値付ける時間」のさらなる充実
- ・「振り返り」の充実（学習カードの工夫、アンケートの活用）

3 具体的な取り組み

5／7 西伯郡小学校研究会体育部会

研究の方向性

11／25 授業研究会（体づくり運動）

伯耆町立岸本小学校 三輪 仁志 教諭

1／28 授業研究会（ボール運動）

大山町立大山小学校 渡辺 悠介 教諭

4 来年度に向けて

今年度は、領域を二つ選択し、授業研究会を行った。毎年行った実践が各学校に広まるように取り組んでいきたい。

実践事例①【「わたしたちの体育」を活用した実践】

4年生「跳び箱運動」の学習

南部町立会見小学校 真島 祐二

1. はじめに

本学年の児童は、「もっと技ができるようになりたい」「きれいにできるようになりたい」という気持ちで、跳び箱運動に取り組むことができる。しかし、新しい技をするのがこわい、どんな練習をしたらいいいのか分からないなど、跳び箱運動に苦手意識を持っている児童も少なくない。そこで、「わたしたちの体育」を活用して一つ一つの技のこつを明確にしていき、技のこつについて友だちと教え合ったり、励まし合ったりする場を設定することにより、跳び箱運動の楽しさの幅を広げていきたいと考えた。

2. 取り組みの実際

跳び箱運動に対する事前アンケートの結果は、半数近くの児童が「苦手である」と回答した。その理由としては、以下のような回答が多くみられた。

- 新しい技はどうしていいかわからないのでこわい。 ○技のこつがわからない。
- どうしたら、できるようになるのかわからない。 ○自分がどんなふうにやっているかわからない。

そこで、恐怖心を取り除いたり、技についてのイメージをつかみやすくしたりする工夫をしていく必要があると考え、次のような点に留意して学習を展開することにした。

- 個々の児童の実態に合わせた場の設定を工夫する。
- 児童が技のイメージをつかみやすくするため、図を表示する。
- 技のこつについて友だちと話し合う場を設定する。
- 学習カードにこつの書き込みをする。

その結果、児童は自分が挑戦する技を絞るやすくなるとともに、自分の技の修正点にも気づき始めた。また、児童に技のイメージをつかませるために師範を示すとともに、「わたしたちの体育」の図を活用したり、技のこつを友だち同士で話し合わせたりする時間を設けた。そして、技のこつとして分かったことや気づいたことを直接「わたしたちの体育」の図に書き込ませるようにした。

はじめは、何を書き込んでいいのかとまどう児童も多くいたので、技のこつにつながるようなポイントをアドバイスしていくようにした。

- 「技の練習で気をつけたことはどんなこと」
- 「技ができるようになったきっかけは何」
- 「技が簡単にできるようになったのは、どこに力を入れたから」
- 「友だちはどんなアドバイスをしてくれた」

「わたしたちの体育」の図に、気づいたことや技のこつについて書き込んだり、友だちとアドバイスし合ったりすることで、次第に技のこつが分かりはじめ、新しい技ができるようになる児童も増えていった。また、技のこつを書き込むことで、友だちへのアドバイスのポイントが分かり、学習の場に声が響くようになっていった。意欲的に新しい技に挑戦したり、友だち同士で声をかけ合ったりする場面が多く見られるようになり、学習に元気が出てきた。

3. 成果と課題

「わたしたちの体育」の図に直接書き込みを行うことで、児童は自分なりの技のイメージを持つことができ、ポイントを意識した練習をすることができるようになってきたと思う。しかし、自分の技のでき具合については分かりにくく、自己評価欄への記入にあたっては、判断ができにくい児童も多くみられた。今後は、ビデオ機器などの導入を図るとともに、自分の技のでき具合を友だちと教え合ったり、評価し合ったりする場もさらに工夫を加えていきたい。



技のこつを話し合い、書き込みをする児童



技のこつについての書き込み

第4学年「体ほぐし運動」の実践を通して

伯耆町立岸本小学校 三輪 仁志

1 はじめに

(1) 運動の持つ特性

体ほぐし運動とは、体づくり運動の一環として、体を動かす楽しさや心地よさを味わうことにより、自分や仲間の体の状態に気付き、体の調子を整えたり、仲間と豊かに交流したりする運動である。学年発達段階で運動特性を見ると、低学年は「多様な動きをつくる運動遊び」として、(ア)体のバランスをとる運動遊び(イ)体を移動する運動遊び(ウ)用具を操作する運動遊び(エ)力試しの運動遊び、といった内容である。中学年は「多様な動きをつくる運動」として、(ア)体のバランスをとる運動(イ)体を移動する運動(ウ)用具を操作する運動(エ)力試しの運動(オ)基本的な動きを組み合わせる運動といった内容である。高学年は「体力を高める運動」として、(ア)体の柔らかさ及び巧みな動きを高めるための運動(イ)力強い動き及び動きを持続する能力を高めるための運動となっている。それぞれの学年段階において、運動特性のねらいを踏まえながら、児童が興味関心を持って運動に取り組める内容を考える必要がある。

(2) 児童の実態

本学年の児童は、男子25名、女子26名、計51名が在籍している。休憩時間に屋外でボール遊びやごっこ遊び、遊具遊びなどを行っている児童も多く見られるが、屋内で体を動かさずに過ごす児童も多く、運動への興味関心の二極化が見られる。逆上がりの成功、登り棒を登り切る、短縄二重跳びができる児童がいずれも50%を切っており、基礎体力の向上が望まれる。そのような実態から、児童の基礎体力向上のために体づくり運動が果た



す役割に大いに期待するところである。よってこれまでの授業では、体づくり運動を準備運動として、モジュール的に授業中に取り入れる(主運動の準備運動的に)ように実践をしてきた。豊富な運動量の確保と、児童相互に関わり合いながら基礎体力を高めることを念頭に置いて学習を進めてきた。

2 実践について

(1) 単元の目標

- 自分と仲間との動きに違いや関わりを意識し、用具の操作を組み合わせた多様な動きからボールゲームの基礎感覚を養う。【思考・判断・表現】

(2) 指導について

これまでの指導を継続し、モジュール的に体ほぐし運動を、準備運動の一環として取り入れる。また、本寺の主運動が「ポートボール」ということで、ボールを使った体ほぐし運動を取り入れ、学習のめあての一貫性を確保している。豊富な運動量の確保、主運動へ向けてのモチベーションの向上、児童相互の関わり合いといった点を考慮しながら、楽しく基礎体力を向上させ、主運動へつなげていく流れを重視して指導を行った。

3 授業の実際

(1) 目標

- ゴール型ボールゲームに向けた体ほぐし運動等で、ボールゲームの基本感覚を養う。(技能)

(2) 準備

- ボール(児童人数分) 他

(3) 学習内容

①リズム大鼓に合わせた体ほぐし(準備)運動

(1人で)・走る ・止まる ・その場で両足とび ・スキップ ・ケンケン ・後ろ向き走り ・ギャロップ(左右) ・ウサギ跳び ・カエル跳び ・カエル倒立 ・カエル足うち
3回以上 (ペアで)・ケンケン3周 ・壁までダッシュ ・手押し車 ・またくぐり ・サイドステップジャンプ ・手押し相撲 ・ケンケン相撲

②ボールを使った体ほぐし運動

・立位ドリブル ・座位ドリブル ・座位ドリブルから立位ドリブル ・座位から立位
・ダッシュドリブル

③チーム分け(リングシュート)・ポートボールゲーム

④ふり返りとあとかたづけ



4 成果と課題

令和元年12月23日に、スポーツ庁は令和元年度の小中学生の「全国体力・運動能力・運動習慣等調査」の結果を公表した。それによると、小中学生ともに前年度よりも体力合計点は下落し、特に小学校男子は調査開始以来、過去最低の数値を記録したとことである。鳥取県は合計点で全国平均よりやや上のところに位置しているが、全国的な傾向は座視できない状況であるといえる。そのような中で、本時の授業のような豊富な運動量と多様な運動を授業の中で展開していくことは、児童の基礎体力を体育の授業時間内に身に付けさせることにおいて有効であると考えている。課題としては、豊富な運動量を確保する時間を保障することと、関わり合いを重視した体育における言語活動の場を確保することをどのように考えていくかということがある。そのためにも「体育授業における言語活動とは何か」ということ(必ずしも「話し合い」ばかりが言語活動ではない)を再考していく必要があると考えている。